

空しく時間ばかりが経過した時期であった。

後半の第2部は「日本せきずい基金の設立と活動」、「臨床試験計画へのせきずい基金の関与」より成る。これは評者にとっても非常に傾聴に値するものであった。多くの難病はこれまでもグループを創設して、社会への理解の訴えや相互利益と理解を高める機能を果たしている。公害病やハンセン病などにみられる通りである。評者にとって最も推進して欲しいのは、損傷の再生医療への取り組みである。もちろん、きわめて先進的なもので安易に考えることは禁物だが、将来の展望の中での光明はこの一点にかかっている。これには遅々としているかもしれないが、焦るあまりごり押しの圧力団体にはなあって欲しくない。著者もこの問題を自分自身のこととして、私見を交えて「喫緊の課題」と力説して結んでいるが、慎重に見つめてゆく態度が最重要な態度であろう。

パラリンピックについて少し触れたい。評者は1962年中村裕博士とStoke Mandeville Hospitalに滞在し、脊損患者が6か月間のスポーツ活動を通じて85%の社会復帰を実現した事実を目の当たりにした。そして1964年東京オリンピックと同時に開催された第2回国際パラリンピックを先頭

に立って誘致成功させた、中村博士の献身的な活動の詳述が欲しかったと思っている。大会当日の救護班員の一人として参加した評者にとっては、忘れることのできないイベントであった。2020年はわが国で第2回目になる国際パラリンピック大会が開催されるが、その蔭に身を削って身障者に寄り添って、「税金を遣って生活をするのではなく、税金を払える人となれ」をモットーにした中村博士の偉業を忘却してはならない。コングロマリットとなった「太陽の家」の設立、運営を成し遂げた博士の献身は脊損の歴史に大きく遺すべきである。

本書は引用文献が豊富で、細かい専門的なものも多数引用されているのに敬意を表したい。評者が過去参考にしたものも多い。著者自身が脊損者となられ、身をもって障害と闘われ、内容が充実した歴史書を世に問われたご努力を高く評価したい。江湖に一読をお勧めする次第である。

(小林 晶)

[見洋書房, 〒615-0026 京都市右京区西院北矢掛町7番地, TEL. 075 (312) 0788, 2019年7月, A5判, 314頁, 5,200円+税]

書籍紹介

新村 拓 著

『売薬と受診の社会史——健康の自己管理社会を生きる——』

日本の医史学の研究者には、新村拓氏が法政大学出版社から継続して出版してきた医療史シリーズに負うところが多いと考える。今回、売薬と受診を主題として新しく一書を出版されたので紹介したい。副題は「健康の自己管理社会を生きる」となっている。まず部・章をあげる。

第I部 近世の薬や・医者・病家

- 第一章 高まる薬の需要 売り込みをはかる薬屋
- 第二章 健康の自己管理社会に於ける病家の心得
- 第三章 医生教育と医者的心得

第四章 服薬と自然治癒の間で

第II部 近世の日記にみる医療行動

- 第一章 相模国三浦郡大和田村の『浜浅葉日記』
- 第二章 治病・防疫を祈願する人びと

第III部 幕末・明治期の日記にみる医療行動

- 第一章 武蔵国橘樹郡長尾村の『鈴木藤助日記』
- 第二章 湯治に込められた思い

第IV部 近現代医療の展開と売薬

- 第一章 売薬に向けられた眼差し
- 第二章 「調剤兼帯の医師」と調剤権の行方

著者のあとがきによれば、本書の構想は30年以前より温められてきたようである。本書は薬・医がともにおおきな社会的存在となった近世、近現代日本の社会を日記を主とする多くの一次資料を用いて活写している。著者の既刊書は、古代医療官人制・仏教の医療・出産と生殖観・死と病と看護・国民皆保険・痴呆老人・ホスピスと老人介護、など日本の医療史の全般を網羅してきた。それぞれが多く文献資料と考察を含み後続する研究者にとり、確実な指針をあたえてくれるものである。

本書を構想した30年前とは大きく異なる、薬

と医療の時代が現出していると紹介者は考えている。急速に進んだ医薬分業や情報化社会とセルフ・メディケーションの流れについては未だ史的な評価は出来ない領域とも思えるが、健康の自己管理社会という切り口からの本書は30年前には記述が出来なかった内容を含んだものであり、この領域の社会科学の正確な記録に富む一書として紹介したい。

(渡部 幹夫)

[法政大学出版局, 〒102-0071 東京都千代田区富士見2-17-1, TEL. 03 (5214) 5540, 四六判, 2,800円+税]